

## 資料

## 高等学校福祉科におけるESDとキャリア教育に関する一考察

—小規模総合学科における実践を通して—

後藤 幸洋・川端 愛子\*

(2019年2月4日受稿)

**抄録：** 次期学習指導要領では、自分自身の人生だけではなく、他者と力を合わせて「持続可能な社会の創り手となる」ことが求められている。学校教育で「持続可能な社会の創り手」を育てるための視点としてESD（Education for Sustainable Development：持続可能な発展のための教育）がある。その理念に基づいた高等学校福祉科におけるキャリア教育についての実践をまとめた。これらの実践を通して、次期学習指導要領の実現に向けた授業づくりのあり方を考察する。

キーワード：高等学校福祉科，ESD，キャリア教育，地域福祉

## I. はじめに

高等学校における教科「福祉」は、平成15年4月から年次進行により段階的に導入された。保住<sup>1)</sup>は、教科「福祉」新設に関して「高齢化に対応する福祉マンパワーの問題もあったが、より広く討議され、結果的には専門的な職業人の育成を目指したり、社会福祉関連の高等教育機関への進学を目指したりするタイプが考えられたと同時にすべての高校生に国民的教養として、かつ青年期にある高校生の発達をより豊かに促すという意味合いで、福祉教育を展開することも討議された」という背景を指摘している。

このことに関わって、後藤<sup>2)</sup>は、福祉科目設置校の多くが介護福祉士国家資格等の福祉に関する資格取得を目的とした教育カリキュラムを構成している状況を報告している。

一方で、次期学習指導要領では、新たに「前文」が設けられ、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」ことが明記された。つまり、自分自身の人生だけではなく、他者と力を

合わせて「持続可能な社会の創り手となる」ことが求められているのである。このことは、教科「福祉」の目標においても網羅されている。

ここで、福祉科における現行の学習指導要領と次期学習指導要領を比較する。まず、現行の学習指導要領では、社会福祉に関する基礎的・基本的な知識と技術の習得を通して「社会福祉の増進に寄与できる創造的な能力と実践的な態度を育てる」ことが示されている（表1-1参照）。次に、次期学習指導要領では、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、福祉を通じ、「人間の尊厳に基づく地域福祉の増進と持続可能な福祉社会の発展を担う職業人として必要な資質・能力」を育成することが示されている（表1-2参照）。

このことから、今後は、福祉に関する資格取得を目指すための教育や、介護職としての就労を目指すための教育にとどまらず、将来の職業人として地域社会とのつながりを意識した授業展開が必要になってくると考える。

手島<sup>3)</sup>は、学校教育で「持続可能な社会の創り手」を育てるための視点としてESD（Education for Sustainable Development：持続可能な発展のた

めの教育)を取り入れた教育実践について報告している。ここでは、特に、ESDカレンダーを作成し、教科をつないだ指導を行うことを通して、教員間のつながりと児童の学習意欲を高めた教育実践の成果が示された。

表1-1 現行の高等学校学習指導要領 (福祉)

第8節 福祉 第1款 目標

社会福祉に関する基礎的・基本的な知識と技術を総合的、体験的に習得させ、社会福祉の理念と意義を理解させるとともに、社会福祉に関する諸課題を主体的に解決し、社会福祉の増進に寄与する創造的な能力と実践的な態度を育てる。

表1-2 次期学習指導要領 (福祉)

第8節 福祉 第1款 目標

福祉の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、福祉を通じ、人間の尊厳に基づく地域福祉の推進と持続可能な福祉社会の発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 福祉の各分野について体系的・系統的に理解するとともに関連する技術を身につけるようにする。
- (2) 福祉に関する課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養う。
- (3) 職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学び、福祉社会の創造と発展に主体的かつ共同的に取り組む態度を養う。

筆者は、高校教員としてESDを基軸とした教育活動を行っており、担当教科「福祉」をはじめ、学校全体としてESDの視点で授業を展開することを検討し実践してきた。そこで、本稿では、筆者が小規模総合学科における福祉に関する科目で取り組んだESDとキャリア教育に関する実践を通して、次期学習指導要領に基づいた教科「福祉」の授業づくりについて考察を深めたいと考える。

## II. 学校の概要とキャリア教育及びESDについて

### 1. 学校の概要とESDの関連

筆者の勤務する北海道留辺蘂高等学校は、昭和23年北見高等学校（現在北見北斗高等学校）の留辺蘂分校として発足した。その後、昭和27年北海道留辺蘂高等学校として独立して以来、60年を超える歴史を通して、地域に貢献する多くの人材を育成している。平成12年度には全日制課程普通科から全日制課程総合学科に学科転換を行った。平成28年度には、少子化の影響を受けて定員を削減し、1学年1学級の小規模総合学科となった。また、平成25年度にはユネスコスクールに加盟し、授業を中心にESDの実践を始めた。その後、キャリア教育の全体図の中にESDの概念を位置付け、全教科の学習計画の中にESDの観点を取り入れた授業内容や評価方法を実践している<sup>4)</sup>。ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校であり、ユネスコが認定する学校である。文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付けている<sup>5)</sup>。ユネスコスクールは、現在、世界180か国以上の国・地域で11,000校以上存在している。日本国内の加盟校数は、「国連持続可能な開発のための教育の10年 (DESD)」が始まった2005年から大幅に増加しており、2018年10月時点で1,116校となった<sup>6)</sup>。

北海道留辺蘂高等学校では、ユネスコスクールの認定を受けた平成25年度より、教科毎に年間の授業内容を書き出し、キャリア教育とESDとの関連づけを意識した教育を行ってきた。しかし、教科や教員によって取り組みに差異が生じるという課題があった。

そこで、当初はユネスコスクール推進教員を1名配置して活動の窓口にする体制であったが、平成27年度からは分掌内にESD業務として組み込み、推進教員と校務分掌との横の連携を強化させた。また、「キャリア教育の全体図 (ESDとの連

携)」を作成し、教科・教員間で共有することにより、学校全体で効果的にキャリア教育とESDに取り組めるよう改善を図った(図1参照)。さらに、年間の取組目標を設定し、学校独自のESDカレンダーを作成した。このESDカレンダーは、教科横

断的に取り組むことができるよう、一年間の各教科の教育内容をまとめたものである(資料1-1及び資料1-2参照)。

また、年2回「ESDふりかえりシート」を活用し、それぞれの活動を総括することで、効果的な

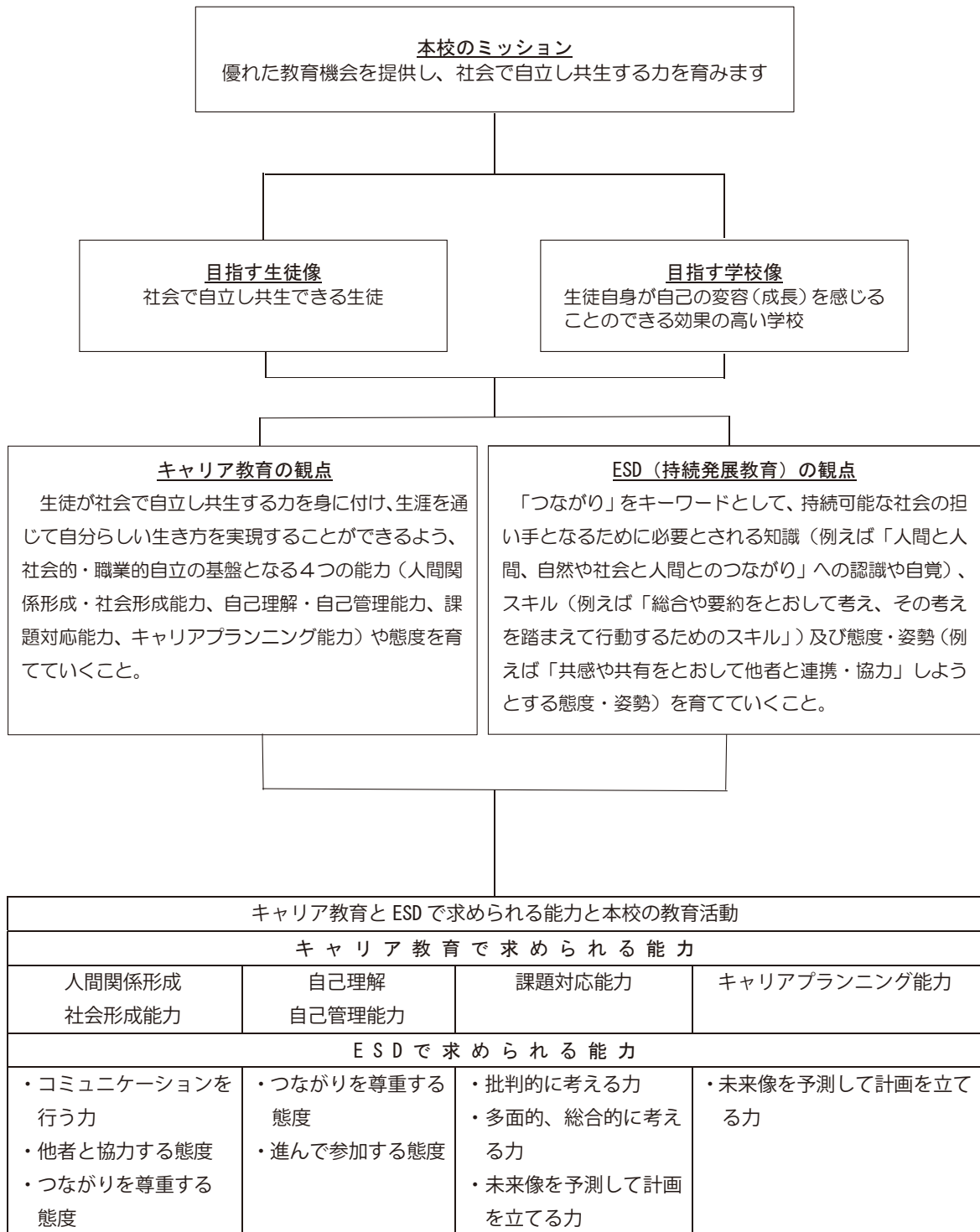


図1 平成30年度留辺蘂高等学校キャリア教育の全体図(ESD計画)



資料 1-2 ESD カレンダー (後期分)

教科	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語						
英語	北見工大留学生講義	北見工大留学生講義		日本独自の文化について	練習問題 定期試験	
数学		練習問題 定期試験		測量		
理科	生活環境とエネルギー 地域環境実習	生活環境とエネルギー 生物多様性を考える 復習問題演習	生物多様性を考える	生物多様性を考える	生物多様性を考える	復習問題演習
社会	環日本府政の課題 租税教室 映像鑑賞	消費者問題 労働者の権利と労働問題 社会保険と年金 復習問題演習	映像鑑賞 復習問題演習	映像鑑賞 復習問題演習	映像鑑賞 復習問題演習	映像鑑賞
福祉	福祉施設へ行くこと ～交流学習①～	中学校での出前授業	クリスマスグッズを作って、高齢者施設へ届けよう ～交流学習②～	福祉施設へ行くこと ～交流学習②～	福祉施設へ行くこと ～交流学習②～	
家庭	動画制作、生活学習 調剤の基礎知識 食から得られる栄養素と健康及び栄養 食料と健康	動画制作、生活学習 調剤の基礎知識 マリアの体験活動 食料と健康	動画制作、生活学習 クリスマスケーキ制作 調剤実習と健康	動画制作 DTP勉強会 ALTや留学生との連携 デジタルコミュニケーション 即応職業所見習いとの連携 健康問題と健康	動画制作 私が馴染み深い食文化 住居と住環境	動画制作 私が馴染み深い食文化 住居と住環境
音楽	IOTと音楽 ふしづくりの音楽	比られるとは何かを言葉から考える ふしづくりの音楽	音楽の生み方を学び、マンダラートを通して、自己の音楽性としての身体性方を考える ふしづくりの音楽	ふしづくりの音楽	シンク્યウリティと音楽、世界の未来 ふしづくりの音楽	ふしづくりの音楽
情報 商業		文書を使った地域広報 ～ポスター・動画作成～				
保健体育	バレエ・ボール ウォーキングの精神で心をつなぐ					
産業社会 と人間	出前授業		ライブプラン作成			
総合的な 学習	見学旅行		アセス		ほっと	
課題研究	進路活動、課題研究	進路活動、課題研究	進路活動、課題研究	進路活動、課題研究	進路活動、課題研究	進路活動、課題研究

-  自己理解・自己管理能力
-  課題対応能力
-  人間関係・社会形成能力
-  キャリアプランニング能力

ESD活動を行えるように工夫した。このふりかえりシートは、2つの大項目から構成されている。項目1は、ESDの教育活動をキャリア教育の4つの観点と関連づけて、各教科担当教員が振り返るようになっている。また、項目2では、ESDの観点

で教科以外の教育活動、例えば、校務分掌や学年指導の中で実践していることを記述できるようになっている（資料2参照）。

総合学科の必修科目である「産業社会と人間」では、「自分を見つめ、自己の進路にふさわしい

資料2 ESDふりかえりシート

### 平成30年度 前学期ESDふりかえりシート（教職員用）

分掌		教科		氏名	
----	--	----	--	----	--

〔項目1〕(教科)  
 平成30年度留辺築高等学校ESDカレンダーや各教科の年間指導計画を基に、取り組み状況と、達成状況について質問します。評価は4段階評価で行いますので、評価欄より値を選択してください。尚、4観点の内容等につきましては、**年度初めの職員会議資料をご参照願います。**

A…十分できた B…ややできた C…あまりできなかった D…できなかった

	キャリア教育の観点	ESDで求められる能力	取組状況	達成状況
①	人間関係形成・社会形成能力	・コミュニケーションを行う力 ・他者と協力する態度 ・つながりを尊重する力	□	□
②	自己理解・自己管理能力	・つながりを尊重する態度 ・進んで参加する態度	□	□
③	課題対応能力	・批判的に考える力 ・多面的、総合的に考える力 ・未来像を予測して計画を立てる力	□	□
④	キャリアプランニング能力	・未来像を予測して計画を立てる力	□	□

※養護教諭は、教育相談・特別支援について各項目の取り組み状況と達成状況を評価ください。

〔項目1-2〕(教科)  
 ESDに基づくキャリア教育に関わる、4つの能力(①人間関係形成・社会形成能力 ②自己理解・自己管理能力 ③課題対応能力 ④キャリアプランニング能力)の育成について、ESDカレンダーや各教科の年間授業計画を基に、前学期の成果と課題、後学期に向けての改善や方策をまとめてください。(自由記述)

成果	課題	改善と方策

※養護教諭は、教育相談・特別支援について記述ください。

〔項目2〕(教科・分掌・学年・生徒指導)  
 前学期をふりかえり、下記ESDキーワードの中で、各教科や生徒指導、分掌や学年指導の中で実践していることをお書きください。また、ESDカレンダーには記載していないが、**後学期に実践しようとしている内容**がありましたら、**実施した月及び実施内容(予定)**を記載してください。(自由記述)

ESDキーワード：『教員向け「ESDふりかえりシート」実施要領』を参照してください。  
 (昨年度)：アクティブラーニング、学び合い、国際理解教育、人権平和教育、環境教育、キャリア教育

〔記入例〕・環境教育について  
 留辺築町内で河川実習を行うなど、地域の自然環境とのつながりを踏まえた学習をしている。また、NPO法人との協働も実施している。

科目を適切に選択させる」「職業・職種についての理解を深め、自分の進路をしっかりと意識させる」ことを目標とし、自己の現在と将来の在り方を考えさせる取組を行っている。また、「総合的な学習の時間」では、2年次のインターンシップの事前事後学習を通じて、生徒が働くことの意義を考え勤労観を養い、3年次では総合学科の学びの集大成として、年次の成長に合わせたゼミ毎の課題研究に取り組んでいる。ゼミの設定は多様な教科・科目の選択履修によって深められた興味・関心を基に設定される。各所属の中で生徒自らが課題を設定し、その課題の解決を図る学習活動を通して、問題解決能力や自発的・創造的な学習態度を育てるとともに自己の将来の進路選択を含め人間としてのあり方について考えさせるものとしている。

## 2. キャリア教育とESDで育成する資質・能力

### (1) キャリア教育について

中央教育審議会<sup>7)</sup>は、キャリア教育を「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義しており、キャリア発達については「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」であるとしている。

また、ここでは、キャリア教育の基盤となる基礎的・汎用的能力に関して「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成されることが示されている<sup>8)</sup>。まず、1つ目の「人間関係・社会形成能力」とは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができる力を指している。次に、2つ目の「自己理解・自己管理能力」とは、自分ができることや意義を感じることを、したいことについて、社会との相互関係を保つ力を指している。そして、3つ目の「課題対応能力」とは、仕事をするうえでの様々な課題を発見・分

析し、適切な計画を立ててその課題を処理し解決することができる力を指している。さらに、4つ目の「キャリアプランニング能力」とは、働くことの意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて働くことを位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を的確に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力を指している。

### (2) ESDによって育む資質・能力について

ESDの視点に立った学習活動を行うために、国立教育政策研究所<sup>9)</sup>が提示した「Ⅰ 多様性」「Ⅱ 相互性」「Ⅲ 有限性」「Ⅳ 公平性」「Ⅴ 連携性」「Ⅵ 責任性」の6つの構成概念の例を参考とした。

まず、ここで1つ目の構成概念である多様性とは、「自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物から成り立ち、それらの中では多種多様な現象が起きていること」を示す。次に、2つ目の相互性とは、「自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること」を示す。そして、3つ目の有限性とは「自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源に支えられながら、不可逆的に変化していること」を指す。続いて、4つ目の公平性とは、「持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを基盤にしていること」を示す。さらに、5つ目の連携性とは、「持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること」を示す。最後に、6つ目の責任性とは、「持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンを持ち、それに向かって変容・変革することにより構築されること」を示すものである<sup>10)</sup>。

さらに、これにかかわって、国立教育政策研究所は、ESDの視点に立った学習指導で重視する能

力・態度として「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の7つを抽出している<sup>10)</sup>。

以上のことから、ESDの視点を導入した授業を行うにあたっては、第一歩としてこれまでの教育実践をふりかえり、前述した中央教育審議会によるキャリア教育の基礎的・汎用的能力としての4つの能力、国立教育政策研究所によるESDの視点に立った6つの構成概念の例や、ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度に関して検討することが求められるのではないかと考えた。それぞれの授業が、これらのどの概念の理解を深めることにつながっていたのかを考えると、今後の実践の手がかりとなるのではないだろうか。これについては次章で検討する。

### Ⅲ. 福祉に関する科目での授業実践

この章では、これまでに行った福祉に関する科目での授業実践について述べる。ここでは、これまでの授業実践を振り返ることを通して、今後の福祉科教育のあり方を考察する。

なお、対象とする授業実践は、平成30年度の2年次選択科目である「社会福祉基礎」及び「生活支援技術」、「介護福祉基礎」、3年次選択科目である「介護総合演習」、3年次の総合的な学習の時間に位置づけられている「課題研究」である。

また、これらの授業実践を振り返るにあたっては、各授業実践が、前述した中央教育審議会によるキャリア教育の基礎的・汎用的能力としての4つの能力、国立教育政策研究所によるESDの視点に立った学習活動を行うための6つの構成概念（多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性）と7つの能力・態度（批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度）におけるどの概念の理解を深

めることにつながっていたのかについても検討したい。

#### 1. 社会福祉基礎

次期学習指導要領における社会福祉基礎の科目目標の中に「健全で持続的な社会の構築を目指して自ら学び、福祉社会の創造と発展を主体的かつ協同的に取り組む態度を養う」とある。まずは、生徒が地域福祉の課題を理解しなければ、福祉社会の創造や発展は期待できないと考え、近隣の福祉施設の職員を講師として招き、地域福祉の課題や介護職の実態に関する学習の機会を設定した（写真資料1参照）。



写真資料1 講師による授業の様子

ここでは、今回の改訂で学習内容に社会福祉援助活動においてリーダーシップなど組織についての充実が求められているため、招聘する講師は施設管理者や介護リーダーなど普段から職場の中心となって活躍している人を選定した。併せて、福祉系学部を設置している道内大学の出張講義を活用し、地域福祉に関連する講義を受ける機会も設定した。これらの取組は、時数にすると月に2～4時間平均で実施した。

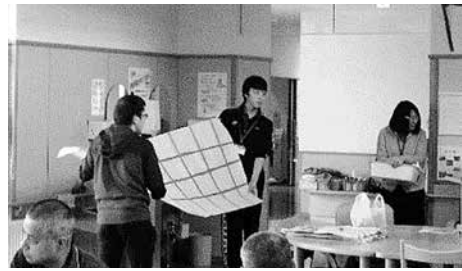
生徒からは「いろいろな人の考え方や問題視している点がそれぞれちがうが自分自身の考えは深まった気がする」や「地域とのつながりの大切さがわかった」など肯定的な感想が得られた。一方で、担当講師の方々からも「今の高校生の考え方が理解できてこれから若手を育てていくのに参考になった」や「地域のことをともに考えてくれる若者の存在の大切さを再認識した」など同じく肯定的な意見が多かった。



以上のことから、これらの実践は、キャリア教育の基盤となる基礎的・汎用的能力としては「人間関係・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の3項目につながる可能性が考えられるのではないだろうか。

また、ESDの視点に立った学習活動を行うための6つの概念においては「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」というすべての概念につながる性質を持つのではないかと推察した。

さらに、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度としての7項目においては、主として「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」の3項目につながる可能性が内包されているのではないかと考えられた。



写真資料2 シャドウイングを取り入れ職員さんと常に同じ動きをしている様子



写真資料3 レクリエーション実践の様子

## 2. 生活支援技術・介護福祉基礎

生活支援技術および介護福祉の2科目に共通している目標は、自立生活の支援や介護に関する課題を見つけることや、職業人に求められる倫理観を養うことである。資格取得を目指すために介護実習を行うことにとどまらず、この目標が達成されることを重視した。

工夫したのは、校内実習と施設実習の併用である。校内実習で單元ごとに6～8時間ほど技術を身につけた後、施設実習で身についたことが生かせるかを検討する。これを繰り返すことで、技術の獲得につながると考えた。なお、施設実習は複数の施設に依頼し、多様化する施設に対応できる力も併せて養うことを目標とした。

また、施設実習では「シャドウイング」を取り入れ、職員の方を同じ動きをすることで、介護職の理解を深めるための工夫を行った（写真資料2参照）。施設実習に慣れてきたところで、生活支援技術の指導内容にもあるレクリエーションの実践も主体となって実施させてもらうよう働きかけた（写真資料3参照）。

以上のことから、これらの実践は、前述したキャリア教育の基盤となる基礎的・汎用的能力において「人間関係・社会形成能力」「課題対応能力」の2項目の育成につながる可能性が示唆されたと考えられる。

また、ESDの視点に立った学習活動を行うための6つの概念においては「多様性」「相互性」「有限性」「連携性」「責任性」の5項目につながる性質を持つのではないかと考えられた。

さらに、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の7つにおいては「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の6項目につながる可能性が内包されているのではないかと推察した。

## 3. 介護総合演習

介護総合演習は、「地域福祉の推進と持続可能な福祉社会の創造と発展に必要な資質・能力を育成する」ことを目標としている。前述した社会福祉基礎をはじめとした福祉活動の体験などに基づ

いて課題を設定して、地域福祉に関する調査、研究を実践してきた。

例えば、社会福祉協議会と連携して校内で「認知症サポーター養成講座」を開催することや、認知症徘徊模擬訓練を自治体一体となって取り組むことで、地域全体が福祉教育の主体となり、その中心に生徒一人ひとりが存在することを体感させた(写真資料4参照)。また、これまでの施設実習では、終了後に必ず関係者を招き、報告会を行うことを通して、専門的な知識、技術の深化を目指した(写真資料5参照)。



写真資料4 行方不明者捜索模擬訓練を地域住民と実施している様子



写真資料5 地域の方を招いての社会福祉実習報告会の様子

生徒の感想を見ると、「この授業は普段から地域の人たちと関わることが多かったから人と話すことが得意になってきたと思う」や「大人の方が私たちのような高校生を大切にしてくれるので、私も自分が暮らす地域を大切にしたいと思った」などコミュニケーション能力の向上や地域への愛着などが育まれてきたことを読み取ることができた。

以上のことから、これらの実践は、前述したキャリア教育の基盤となる基礎的・汎用的能力において、「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニン

グ能力」の4項目を育成することにつながる可能性が期待できるのではないかと考えた。

また、ESDの視点に立った学習活動を行うための6つの概念においては「多様性」「相互性」「連携性」「責任性」の4つの概念につながる可能性が内包されているのではないかと推察した。

さらに、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度としての「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の6項目につながるのではないかと考えられた。

#### 4. 総合的な学習の時間(課題研究)

総合的な学習の時間は、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てることを目標に、地域の住民が校内で一室に会える機会として「るべ美カフェ」を開催した(写真資料6参照)。この「るべ美カフェ」は合計3回実施し、多くの施設利用者や地域住民に参加してもらうことができ、好評を得た。

そして、前年度より取り組んでいる「福祉マップ」についても地域から大きな反響があった。福祉マップとは、普段の生活なら支障のない道路でも車いすで走行するとどのような障壁があるかを調査したものを地図上に落とし込んでいくものである<sup>11)</sup>。平成30年度は、障壁になるポイントについて、地域住民からインタビュー調査を行い、実際に生活している人の声もマップに反映させた(写真資料7参照)。



写真資料6 地域住民と高校生がお茶を飲みながら交流する「るべ美カフェ」の様子



写真資料7 作成した福祉マップを地域住民に公開している様子

作成した福祉マップは、公民館に掲示し、多くの地域住民に見てもらうことができた。これらの活動を通して、生徒が自己肯定感を高めることを目指した。

以上のことから、この実践では、前述したキャリア教育の基盤となる基礎的・汎用的能力として「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4項目を育成できる可能性が期待できるのではないかと考えた。

また、ESDの視点に立った学習活動を行うための6つの概念においては、「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」のすべての項目につながる可能性を内包していると捉えられた。

さらに、この実践は、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度としても「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の7項目すべてにつながる実践性の高い取組であったのではないかと推察した。

#### IV. おわりに

筆者らは、総合学科の特色の1つである「産業社会と人間」をはじめ、教科指導や行事などすべての教育活動を通して、キャリア教育とESDで求められている能力の育成に計画的・組織的に取り組み、特に生徒のコミュニケーション能力や表現

力、協働で学ぶ力と姿勢を育んできた。

教科「福祉」は、これらの活動を通して、生徒の資質・能力を育むことが大いに期待できる科目であると考えられる。この教科では、福祉に関する資格取得を目指すことにとどまるのではなく、持続可能な福祉社会を築こうとする資質・能力を育てていくことが肝要であるといえる。

また、生徒が高校卒業後も地元に残る傾向が強くなっている状況や、介護職に就いた生徒の離職率が非常に少なくなっている状況は、これらの実践の成果としての側面を持ち合わせているのではないかと感じられ、さらに詳細に実践の成果を確認していくことを今後の課題としたい。

今後は、高校教育においても教科横断的な学びが求められている。教科「福祉」とつながりをもって学ぶ生徒を増やし、介護福祉を学ぶ生徒以外にもその効果を波及させていけば、地域福祉の推進にも繋がっていくと考える。

そして、これからは、学校だけではなく、関係機関を含む地域社会が「福祉教育の主体」となり、学校とともに地域福祉に関する探究活動を進めていくことが求められると思われる。そのためには、学校と地域社会の架け橋のような存在となることが、今後の高等学校福祉科教員に求められる資質・能力なのではないだろうか。

#### 附 記

本稿投稿にあたっては、北海道留辺蘂高等学校の赤津博久学校長の承諾を得ています。研究にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。また、北海道文教大学大学院の三上勝夫教授、北海道教育大学大学院の植木克美教授には大変お世話になりました。ここに附記して謝意を表します。

#### 文 献

- 1) 保住芳美：大学における福祉科教育法の課題－高等学校福祉科教員養成のあり方を考える－。川崎医療福祉学会誌，vol.14，239-247，2005。

- 2) 後藤幸洋：高校で“福祉マルシェ”を開催しよう～社会に開かれた教育課程の実現に向けて～. 学事出版, 月刊高校教育9月号, 46-49, 2018.
- 3) 手島利夫：学校発・ESDの学び. 教育出版, 2017.
- 4) 文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会：ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引, 2016.
- 5) 文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会：ユネスコスクールで目指す SDGs 持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development, 2018年改訂版（2008年6月初版）.
- 6) 文部科学省ホームページ 日本ユネスコ国内委員会  
www.mext.go.jp/unesco/004/1339976.htm  
（2013年10月登録）
- 7) 中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）, 2011.
- 8) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター：ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み, 2012.
- 9) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター：学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 最終報告書, 2012.
- 10) 佐藤真久・岡本弥彦：国立教育政策研究所によるESD枠組の機能と役割－「持続可能性キー・コンピテンシー」の先行研究レビュー・分類化研究に基づいて－. 環境教育（日本環境教育学会）, Vol.25-1, 144-151, 2015.
- 11) 後藤幸洋・後藤 守：高等学校における福祉教育推進に関する一考察～福祉マップ作成を通して～. 日本福祉心理学会第16回大会発表論文集, 41, 2018.
- 12) 後藤幸洋・川端愛子・後藤 守：個別のソーシャルスキルトレーニングに関する一考察－全日制高等学校における実践を通して－. コミュニケーション障害研究（北海道コミュニケーション能力育成研究会）, 第18号, 43-54, 2018.
- 13) 松永繁：日本におけるキャリア教育と課題－キャリア教育の先行研究からの検討. 敬心・研究ジャーナル, 27-36, 2017.

（編集委員会付記）

本論文に示されている実践は、「平成30年度北海道教育実践表彰」を受賞したものであり、記して敬意を表す。

